



ごめんなさい、アタシたち、オカマです。こんなにキレイに生まれたいけど、やっぱりオカマです。あ、右から2番目の外人、この人だけは別。女優もやってイラストも描いて、写真も撮れて尚かつ映画監督。しかも女。ほとんど許せないけど、紹介しちゃうわ。

フランスの女性映画監督ヴィルジニ・テヴェネ(34)です。彼女の初監督作となった「ガーターベルトの夜」が日本で4月下旬から公開されることになってそのプロモーション来日。この映画、好奇心でウズウズしてる女のコが、年下の可愛い

坊やを連れて夜のパリのセクシースポットを探検して歩くという話。遊ぶのが大好きで、遊んでるコたちを見るのもっと大好きという監督自身の「思い出のスケッチ」を映画にしたそう。制作するのにあたって、パリでいろんなセクシースポット取材したのです。

で、後学のため、5日、日本の夜を代表する新宿は歌舞伎町のキャバクラ、ストリップ、のぞき部屋、そしてこのゲイボーイシヨークラブ「ベルファム」を訪問。テレビに出演したりして有名になった康子(右端)、ひかる(左から2番め)ら

オカマちゃん相手にいくつものときからうなったのか、親は反対しないのか、パリは性転換者が多いけど日本はどうか、性的関係はうまくいっているか、相手は男か女か、何か私に言うことないかと盛んに質問。対するオカマちゃんは、やや圧倒され気味。「日本じゃいくらがんばっても男扱いよ」とぶちまけてもいたけど。

して、監督の感想。「パリのオカマは雰囲気がい暗い。皆人生をひきぎずっている感じだけれど、日本は明るい。町の構造(歌舞伎町のネオンギラギラ)にも共通して、人を呼び込んでるよう」。で

も「スター願望」を持つてることだけは共通するものがあるとか。ストリップの店で感じたことは、日本の男は淋しさを紛らすために来るのかなってこと。だってストリップが「お母さん」のように見えたから。あまり興味なかったようです。

ちなみに「ガーター」は84年の作品で火遊び気分の香りが漂っていたけれど、監督によればこの時期でなければ作り得なかったものとか。「この後エイズ騒動が起こって、セックスは命がけの行為になったから」。ホント、淋しい世の中になっ

てしまったこと。 PHOTO 清水英治